

イザヤ書41章「東から来る者」

1A 恐れる島々 1-7

2A 選ばれたヤコブ 8-20

1B 手を握り守られる方 8-16

2B 主から流れる水 17-20

3A 後に起こることを告げる方 21-29

1B 神々への挑戦 21-24

2B 前もって告げられない者たち 25-29

本文

イザヤ書 41 章を開いてください。私たちの学びは、イザヤ書の後半に入っています。ここイザヤの預言の後半、エルサレムに対して、慰めよ、慰めよと呼びかけている、慰めの希望の言葉となっています。良い知らせがエルサレムから出て、神である主が戻ってこられ、再び羊飼いのように、彼らを養ってくださいます。

イザヤが預言しているのは、すでにバビロンに捕え移された民です。彼にとっては、ずっと後の話です。おそらく、紀元前 700 年の少し後に預言しているものです。そしてバビロンからの帰還は 539 年ですから、150 年ぐらい前のことです。主は、これだけ前に語っているのだから、わたしだけが神であると宣言されます。他の神々は、どんなことをしても前もって後のことを語ることはできない、けれども、わたしは今から告げる、ということです。

彼らユダヤ人が、エルサレムに神殿もなく、祖国を失い、バビロンの中で偶像に囲まれていることを思ってください。そこで、主は、ご自身が、はるかにそれら神々と呼ばれているものより、すぐれており、比べようがないことを教えて、励ましておられます。天地を造られ、そこには人が到底、思いつきもしないほどの知恵があります。人がこれが正しい、あれが良いと言おうが、全く異なる方法で、事を行われる方であることを、40 章において現してくださいました。

だから、ヤコブに対して、すなわちイスラエルの子らに対して、主を待ち望みなさいと励ましたのです。主は、必ず、彼らのためにことを行ってくださるのです。そして待ち望めば、今、疲れているかもしれないけれども、新たな力を得るよ、と約束しておられます。

そして 41 章に入ります。主は、諸国の民に対して語りかけ、また、イスラエルの民に語りかけ、再び、ご自身と神々と呼ばれているものを比べて、ご自身だけが神であることを示されます。

1A 恐れる島々 1-7

1「島々よ、わたしの前で静まれ。諸国の民よ、新しく力を得よ。近寄れ。そして語れ。われわれは、ともに、さばきに近づこう。

ヤコブ、イスラエルに対して、先ほど 40 章の 27 節以降で、主を待ち望む者が新たな力を得ると約束されました。同じように、諸国の民に対しても、新たな力を得よと語りかけています。

まず、「島々よ」と呼びかけていますね。40 章 15 節には、「国々は手桶の一しずく、秤の上のごみのように見なされる。見よ。主は島々をちりのように取り上げる。」と言われていました。諸国の民でも、はるか遠くにあるところを、「島々」と呼ばれています。新約聖書には、使徒の働きでイエス様が、「地の果て」(1:8)と言われましたが、それと同じです。イスラエルの神とは遠く離れているような民に対しても、主はご自身を示されているのです。私は日本の島々を思います。極東の列島であっても、主は語りかけておられるのです。

新しく力を得るために、「わたしの前で静まれ」と命じておられます。彼らは、これから見ていく、東からの者に対抗するために、せっせと準備を始めています。けれども、そんなことをするのはなく、わたしの前で静まれ、と言われていているのです。神を知らない人の動きは、いつも騒がしくしているということです。今、目の前にあることについて一喜一憂しています。また、自分たちの力と知恵で、ああだこうだといういろいろやりくりしています。しかし、しなければいけないのは、自分たちが動くことではなく、主の前に静まることなのです。

それから、「われわれは、ともに、さばきに近づこう。」と言われていています。旧約聖書では、正しく判断する呼びかけの時に、さばきの座に行こうという呼びかけがあります。ヨブは、何度となく、さばきの座について語りました。自分の受けている苦しみについて、全能者である神と論じたところで、自分の正しさなんて論証できないことを知っているの、「仲裁者がほしい」と嘆いているところがありますね。「9:32-33 神は、私のように人間ではありません。その方に、私が応じることができでしょうか。「さあ、さばきの座に一緒に行きましょう」と。私たち二人の上に手を置く仲裁者が、私たちの間にはいません。」神でありながら人となられたイエスこそが、仲裁者なのですが、ヨブはまだそのことを知りません。

そしてイザヤの預言にも、論じ合ってみようと呼びかけている主のことばがあります。「1:18 「さあ、来たれ。論じ合おう。——【主】は言われる——たとえ、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとえ、紅のように赤くても、羊の毛のようになる。」主が憐れみ豊かで、罪を清めてくださるのだから、悔い改めることが理にかなっているだろうと問いかけておられるのです。ここでは、国々が、ご自身が前もって伝えておられることをよく考えなさいと、呼びかけます。

² だれが一人の者を東から起こし、その行く先々で勝利を収めさせるのか。だれが彼の前に国々を渡し、王たちを踏みにじらせるのか。彼はその剣で彼らをちりのようにし、その弓で藁のように追い散らす。³ 彼は彼らを追い、難なく進んで行く。まだ自分の足で行ったことのない道を。

この「一人の者を東から起こし」というのは、ペルシアのキュロス王です。ペルシアは今のイランの古代王国であり、イスラエルから見れば東方にあります。彼は、メディア王国に従う小さな国ペルシアの王の王子として生まれます。しかし、メディアに対して反乱を起こし、征服します。そしてトルコ西部にあるリュディアを征服します。サルデイスがリュディア王国の都ですが、その陥落については、イエス様が、サルデイスにある教会に警告したように、「眠っている」という状態でした。サルデイスを攻略したのは、このキュロスです。それからスサを倒して古代からイランの地域を支配していたエラム王国を征服します。

そして紀元前 539 年にバビロンを倒します。その時に捕囚の民ユダヤ人を解放します。ペルシア帝国は、インドを東の境として、トルコやギリシアの一部、それからエジプトの一部にまで及び、史上空前の大帝国になりました。このことを、主はイザヤを通して、キュロスの生まれる、おそらく 100 年ぐらい前に語っておられたのです。

⁴ だれが、最初から代々の人々に呼びかけて これらをなし、これらを行ったのか。主であるわたしだ。わたしは初めであり、また終わりとともにある。わたしがそれだ。

「だれが」、「だれが」という言葉が繰り返されています。考えてもみなかった動きをする王であり、人々は過去の知恵を用いることができません。前代未聞だからです。人々は何とかして、「これはこのはずである。」という方程式を見いだそうとします。しかし、良く考えてみるのです。実際にこの王が生まれる 100 年ぐらい前に、どうしてそんなことが起こると予測できるでしょうか？天地創造の神は、今、世界帝国の君主が現れることを、イザヤを通して初めから告げさせて、それでご自分が、初めから終わりまで支配しておられる神であることを証しておられるのです。

⁵ 島々は見て恐れる。地の果ては震えながら、近づき、やって来る。⁶ 彼らは助け合い、その兄弟に『強くあれ』と言う。⁷ 鋳物師は金細工人を励まし、金槌で打つ者は、鉄床をたたく者を励まして、はんだ付けについて『それで良い』と言い、釘で打ち付けて動かないようにする。

島々、地の果てにいる者たちが、この東からの者に対して、互いに助け合って連合して、対抗していこうと努力しています。それが、必死に偶像を細工していく者たちの姿によく表れています。主がなされているかもしれないという思い巡らしがなく、目の前にある事柄に対して近視眼的に動いています。「互いに助け合おう！」というのは、主を待ち望んでいないのであれば、悪いものです。バベルの塔やハルマゲドンの戦いは、一致して互いに助け合って神に反抗しているのですから！

ところで、興味深いことですが、東から出てくる者として思い出すのは、東方からの博士です。ユダヤ人の王が生まれたということ、星によって知ったということです。ユダヤ人の王であったヘロデ王も、またエルサレムの住民も動揺したと、マタイは書き記しています(2:3)。まさか東方から、なぜユダヤ人の王のしるしがあるのか？と思ったでしょうが、イザヤは、東方からキュロスが来て、彼がユダヤ人を解放すると預言していたのです。東方だからといって、神と関りがないのではなく、むしろ、預言によって語られていました。主は、東から西まで、すべての者の神です。

2A 選ばれたヤコブ 8-20

1B 手を握り守られる方 8-16

⁸ だがイスラエルよ、あなたはわたしのしもべ。わたしが選んだヤコブよ、あなたは、わたしの友アブラハムの裔だ。⁹ わたしはあなたを地の果てから連れ出し、地の隅々から呼び出して言った。『あなたは、わたしのしもべ。わたしはあなたを選んで、退けなかった』と。

東から来る者について、諸国の民とは全く異なる意味が、あなたがた、イスラエルにはあるのだよ、と主は言われます。彼らにとっては、自分たちをことごとく踏みつけていく者でしょうが、イスラエルにとっては、彼らを解放する王であります。同じペルシアなのですが、正反対の意味を持っているのです。

その違いはどこから出てくるか？とても大切な呼びかけの言葉が三つあります。一つは、「わたしのしもべ」であります。これから、イザヤの預言でこの呼び名は、メシアご自身にも使われます。この意味しているのは、「主が命じられたことは、そのまま従う。損得勘定抜きで信じて、受け入れ、そして実行する。」ということです。偶像礼拝の始まりは、損得勘定から始まります。「自分にとって益になるから、この言葉を受け入れる。」ということです。自分が主人であり、神々は僕になるのです。しかし、まず、どんなことがあっても、主が言われたことだからという理由だけで、それを行なっていくということです。

これは私たちが卑しい立場に置かれているのでしょうか？いいえ、「しもべ」という呼び名は名誉ある、高い地位の呼び名です。この呼び名はアブラハムに対して使われました。モーセに対して使われました。ダビデに対して使われました。ヨブに対しても使われています。イザヤに対しても使われています。そして何よりも、私たちの主イエス・キリストに対して父なる神が、「わたしのしもべ」と呼ばれました(マタイ 12:18)。

そして、同じように「わたしが選んだヤコブ」という呼び名も大切です。そこには、神の恵みによる大いなる特権があります。アブラハムに対して与えられた、大きな国民となり、彼による世界の人々が祝福を受けるという使命であり、選ばれたということは光栄なことでもあります。

そして、「選び」には、神の一方的な愛と憐れみがあります。ヤコブを神が選ばれたのは、ヤコブが良い行いをしたからではなく、何も行ないをしていない母の胎にいる時から、主はエサウではなくヤコブを選ばれました。それは、もっぱら神の憐れみによって彼を愛しておられたからです。

そして、「わたしの友」とまで呼んでいます。これは主がアブラハムに使われた呼び名であり、友という言葉には、「他の人には言えない、隠していることであっても、あなたは友であるから包み隠さず明かす」という意味合いがあります。主が、ソドムとゴモラを滅ぼされる前にアブラハムにその意図をお語りになりました。

ですから、主が私たちを、キリストにあつて、ご自分のしもべ、ご自分の愛し選ばれた者、ご自分の友としてくださっているという真実を知ってください！このことを知っていれば、周囲の同調圧力から解放されて、主の守りの御手の中で導かれることが可能なのです。

¹⁰ 恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

バビロンの地にいるユダヤ人たちにとって、捕虜であり奴隷の部分として、彼らは恐れに満ちていたことでしょう。為政者がいかようにでも、何でもできるのですから。しかし、彼らは恐れる必要はないと励ましています。主が共におられることを約束しておられます。そして、島々を塵のようにみされる方が、彼らの神なのです。共におられるので、彼らを強くし、助け、神の義の右の手で守られます。

イエス様がよみがえられてから、彼らに世界に対して、福音を宣べ伝え、すべての人を弟子とみなさいと命じられた時に、弟子たちは何でもない人たちでした。当然、恐れが先んじます。けれども、イエス様が約束されましたね、「見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。(マタイ 28:20)」

ところで、神が彼らを守る「わたしの義の右の手」とは、何でしょうか？右は権威と力を示しています。神の義によって、彼らをご自分の権威と力によって守るということです。大事なのは、この義は神ご自身にあるということです。彼らの義ではなく、神の義なのです。信仰によって、神か恵みのら賜物として与えられるところの義です。

パウロも、この戦いについて語りました。彼の宣教の働きに、いろいろな反対、混乱、迫害がありました。けれども、彼を支えたのは、神の義の右の手です。「ロマ 8:33-34 だれが、神に選ばれた者たちを訴えるのですか。神が義と認めてくださるのです。だれが、私たちが罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、し

かも私たちのために、とりなしてくださるのです。」

¹¹ 見よ。あなたに向かっていきり立つ者は みな恥を見て辱められ、あなたと争う者たちは 無いものようになって滅びる。¹² あなたと言ひ争う者を探しても、あなたは見つけることができず、あなたと戦う者たちは、全く無いものようになってしまう。¹³ わたしがあなたの神、主であり、あなたの右の手を固く握り、『恐れるな。わたしがあなたを助ける』と言う者だからである。

今、ロマ 8 章を読んだように、神の民とされている者たちには、反対や争い、中傷がつきものです。イエス様も山上の説教で、義のために迫害されること、いわれもないことで中傷を受けることを語られました。けれども、義の右の御手が私たちを守ってくださり、ここで主が語られているように、相手の方が恥を見て、無いもののようにされて、よく見たら、自分に言ひ争う者はいなくなり、戦う者もなくなります。主の右の手が固く握ってくださいます。

¹⁴ 恐れるな。虫けらのヤコブ、イスラエルの人々。わたしがあなたを助ける。——主のことば——あなたを贖う者はイスラエルの聖なる者。¹⁵ 見よ。わたしはあなたを 鋭く新しい両刃の打穀機とする。あなたは山々を踏みつけて粉々に砕き、丘を穀粒のようにする。¹⁶ あなたがそれをあおぐと、風が運び去り、暴風がそれをまき散らす。あなたは主にあつて喜び、イスラエルの聖なる者によって誇る。

ものすごい対比ですね。ヤコブ、イスラエルの人々を主は「虫けら」と呼ばれています。容易に踏みつけられて、つぶされてしまうような存在です。そのか弱い存在が、なんと山々を踏みつけて粉々に砕くような打穀機としてくださいます。つまり、この力は完全に彼らのものではなく、もっぱら神ご自身が彼らと共におられるからです。

私たちはぜひ、この力を味わっていきたいです。イエス様は、私たち自身では何もできないこと、けれども、ご自身に留まる者は何でもできることを約束されました。「ヨハ 15:5 わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」パウロは、ピリピの人たちはこう言いました。「私を強くしてくださる方によって、私はどんなことでもできます。(4:13)」自分だけでは虫けらです。けれども、主と共におられるので、ことごとく山々を打ち砕くことができます。そして、誇りは自分ではなく、主ご自身になるのです。

2B 主から流れる水 17-20

¹⁷ 苦しむ者や貧しい者が水を求めても それはなく、その舌は渴きで干からびる。わたし、主は彼らに答え、イスラエルの神は彼らを見捨てない。

苦しむ者や貧しい者は、水を求めてもなく、その舌が渴きで干からびることは、常にあります。しかし、主は彼らを選ばれました。決してそのようにすることはない、見捨てないと約束されます。

¹⁸ わたしは裸の丘に川を開く。平地のただ中には泉を。荒野を水のある沢とし、砂漠の地を水の源とする。

主は、ご自身に背いた民には、天から雨を降らせず、土地が乾ききる呪いをもたらすことを語られました。そして、アハブの時代のように飢饉になることもありました。けれども、主は、帰還したユダヤ人がそのようになることはないようにすると約束されます。

イエス様は、イザヤの預言にある、荒野や砂漠に水が出てくるようにさせる約束をとらえて、ご自身の与える水の約束をされました。「ヨハ 7:37-38 さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立ち上がり、大きな声で言われた。「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります。」

¹⁹ わたしは荒野に、杉、アカシヤ、ミルトス、オリーブの木を植え、荒れ地に、もみの木、すずかけの木、檜をともに植える。²⁰ それは、主の手がこれを行い、イスラエルの聖なる者がこれを創造したことを、彼らが見て知り、心に留めて、ともに悟るためである。

イエス様が御霊の約束として、イザヤの預言を語られましたが、それだけではありません。これは、文字通りにも実現します。終わりの日、帰還した民に、主は水を豊かに与えてください、ここにあるように、いろいろな種類の木々を植えて、これらに主の御手があることを知るようにさせていただきます。今、イスラエルの土地は緑がたくさんあります。かつて、オスマン・トルコの時代は荒地と沼地であったところが、ここに書かれている木々が植えられています。彼らのほとんどがまだ、主なる神を信じていませんが、しかし恵みが先んじてこのことが起こっています。イエス様が再び来られた時には、彼らは完全に、主がこのことをされたと悟ることでしょう。

3A 後に起こることを告げる方 21-29

1B 神々への挑戦 21-24

²¹ あなたがたの訴えを出せ。——主は言われる—— あなたがたの証拠を持って来い。——ヤコブの王は言われる——

先ほどの、諸国の民に対する問いかけに戻っています。「ともに、さばきに近づこう。(41:1)」と呼びかけられましたが、今、「訴えを出せ、証拠を持ってこい」と挑みかかっておられます。そして、今、主が語られている相手は、諸国の民の神々に対してです。ちょうど、預言者エリヤが、バアル

の預言者たちに挑んだのと同じです。どちらが神なのかを確かめています。

²² 持って来て、後に起ころうとする事を告げよ。前の事は何であったのかを告げよ。そうすれば、われわれもそれを心に留め、後の事を知ることができるだろう。または、来たるべき事をわれわれに聞かせよ。

後に起こること告げたことで、前にあなたがたが語ったことはあるかどうか教えなさいと言われてます。今の大きな宗教で、後に起こると告げて、それでその通りになったという預言はあったでしょうか？イスラム教で、ムハンマドについて前もって告げられた預言はありますか？仏教で、仏陀が来ることが告げられたものはありますか？ないですね、イエスについてはどうでしょうか？膨大にあります。前に起こったこと、イエスが地上で行われたことで、後に起こると言われたことでそのとおりになったことは、無数にあります。

²³ 後に起ころうとすることを告げよ。そうすれば、われわれは あなたがたが神々であることを知るだろう。良いことでも悪いことでもしてみよ。そうすれば、われわれはともに見て驚くだろう。²⁴ 見よ、あなたがたは無に等しい。あなたがたの行いは空しい。あなたがたを選ぶ者は忌まわしい。

預言がいかに大切であるか、主ご自身がイザヤを通して強調しておられますね。聖書の神を信じない人々に対して、これほど客観性をもって、この神が生きていることを実証するものはありません。このことは、私たちの伝道の大きな道具になりますし、また、私たちの信仰の確認にもなります。主は、神を信じない世界において、預言によってご自身が神であることを高らかに宣言しておられるのです。

2B 前もって告げられない者たち 25-29

²⁵ わたしが北から人を起こすと、彼は来て、日の昇るところから、わたしの名を呼ぶ。彼は長官たちを漆喰のように踏む。陶器師が粘土を踏みつけるように。

主は繰り返して、キュロスが来ることを語られます。「北から人を起こす」と言われていますが、イスラエルにとって、東にあるペルシアであっても、アラビア砂漠よりも上、ユーフラテス川の上流から南下してこないイスラエルにはやってくることはできません。広大な砂漠の地を横断することはできないからです。ですから、次に「日の昇るところから」と言って、東からの王であることを言っておられます。そして、長官たちを、漆喰で舗装された道を歩くように踏みつけるとあります。さらに、陶器師が粘土を踏みつけるとありますが、いかようにでもできる主権を強調しています。

²⁶ だれが、初めから告げて、われわれが知るようにしたか。だれが、あらかじめわれわれに告げて、『それは正しい』と言うようにしたか。告げた者は一人もなく、聞かせた者も一人もなく、あなたがた

の言うことを聞いた者も 一人もいなかった。²⁷ わたしが最初にシオンに『見よ、それらはここにある』と言い、わたしがエルサレムに『良い知らせを伝える者を与える』と言った。²⁸ しかし、見回しても、だれもない。彼らの中には助言者がいない。わたしが尋ねても返事のできる者が。²⁹ 見よ、彼らはみな偽りで、そのなすことは空しい。彼らの鑄像は風のように何も無い。」

初めから告げることはだれもないと強調しています。シオンで、みことばが語られること以外は、だれも、キュロスについて告げる者はありません。それで、いかに他の言葉が空しく、彼らの偶像が空しいかを強調しておられます。

私たちは、バビロンにいるユダヤ人と同じように、あらゆる神々、知恵と呼ばれるものに取り囲まれています。しかし、それがいかに空しいかを知らないといけません。私たちの信じている、神のことば、福音のことばこそが、私たちの知恵であり力なのです。「 I コリ 1:18-21 十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です。「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、悟りある者の悟りを消し去る」と書いてあるからです。知恵ある者はどこにいますか。学者はどこにいますか。この世の論客はどこにいますか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。神の知恵により、この世は自分の知恵によって神を知ることがありませんでした。それゆえ神は、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を救うことにされたのです。」